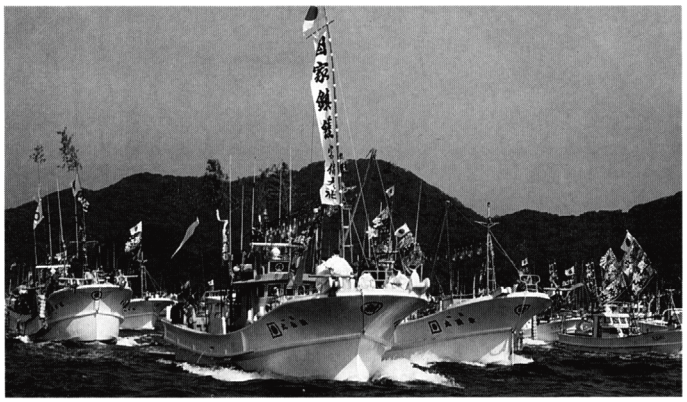
宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
〒811-35 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940－62－1311㈹
定価 一年送料共 1000円

みあれ祭斎行

〝往時の宗像水軍の勇姿を彷彿させる〟



当大社秋季大祭が、十月一日から三日に亘り盛大裡に斎行された。この祭典は玄界灘洋上に鎮座される沖津宮（沖ノ島）、中津宮（筑前大島）、辺津宮（玄海町）の三宮の御神璽が一年に一度、辺津宮に集われて執り行われる一大神事でもある「みあれ祭」は、秋季大祭に際して、沖津宮、中津宮の御神璽が辺津宮へ御神幸の途時、玄界灘を渡御される神事で、漁業関係者の奉仕により約四百隻の漁船が参加する一大パレードである。その「みあれ祭」に先立ち、去る九月十三日に玄界灘の絶海の孤島・沖ノ島に鎮座する沖津宮の御神璽を大島中津宮まで御迎えする沖津宮神迎え神事が大島「海久丸」（船長・遠藤三笠氏）の御座船奉仕のもと厳粛に斎行され、大祭前日まで中津宮本殿に奉安された。

十月一日午前八時三十分、中津宮出御祭を斎行。沖津宮、中津宮の御神璽を奉安した輦台は、大島と鐘崎の海洋神事奉賛会の青年等に担がれ、大島小学校の鼓笛隊の先導により大島港中央ふ頭へと御神幸を行い、沖津宮御座船第一新幸丸（船長・八尋時男氏）、中津宮御座船伸洋丸（船長・宮本昭男氏）にそれぞれが奉安された。

一方辺津宮では、午前九時沖津宮中津宮の御神璽を出迎える為の辺津宮出御祭が神職三名の奉仕により斎行され、辺津宮の御神璽が御座車により先導車、警備車に続き、神湊まで神幸された。

午前九時三十分、大島洋上で船団出港の合図である花火の音が響き渡ると、先導船を先頭に御座船、供奉船が一斉に白波を立てて大島港を出港。先導船の神職が前方の海上をお祓いする中、約四百隻の大船団は、玄界の大海原を所狭しと地ノ島へと先づ進路を取り、鐘崎沖で神湊へ進路を転じた。

御座船には、「国家鎮護宗像大社」と書かれた大幟が掲げられ、紅白の長手、国旗、大漁旗をなびかせ、また全ての船には船首に波切御幣を戴き満船飾にしてきらびやかな姿であった。将に往時の宗像水軍の勇姿を彷彿させる大海上絵巻であった。

この海上パレードを一目見ようと、鐘崎から神湊に至る海岸には大勢の人で埋め尽され、上空には取材用のヘリコプターが飛びかった。

定刻の午前十時三十分、神湊港に入港を告げる花火が打ち上げられ、第一新幸丸、伸洋丸の二隻の御座船が接岸した。

神湊では沖・中両宮の御神璽をお迎えすべく、辺津宮の御神璽がお揃いになられた後、先導の神職が大麻で道を祓清め、警蹕が響きわたる中、三台の輦台が沿道の人々が見守る中頓宮へと神幸した。

頓宮へ着御後、直ちに頓宮祭が執り行われた。祭典終了後、今回御座船として御奉仕頂いた各漁船の船長に対し御座船状が贈呈された。御座船は、例年大島と鐘崎の両漁協にお願いし、新造船に御奉仕頂いている。この御座船状は、各船に御奉仕頂いた事への感謝を表しているのである。

神具・装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡店 福岡市博多区東公園二－三一（〒812）
電話 福岡(九二)六五一－九四五六番
本店 京都市下京区油小路六条北入（〒600）
電話 京都(〇七五)三四一－三三四一㈹－四番
三四三－三三四一番

頓宮祭を終え、三宮の御神璽は、神職の手により輦台から御座車に奉持されて、辺津宮へと御神幸された。

入御の後、当大社最大の祭典である秋季大祭（田島放生会）は三日間に亘り、盛大裡に斎行された。

七五三祭の御案内

毎年十一月十五日に数え年三才の男女児、五才の男児、七才の女児をつれて神社に参拝し、今日までの無事発育を感謝し、更に将来の成長を祈願するお祭りです。

昔は三才の男女は髪置、五才の男児は袴着、七才の女子は帯解きの祝いが行われていました。この我国古来の慣習を今日に伝えるのが、七五三祭りです。

当大社でも、お子様の健やかな成長と幸せをお祈りする、恒例の「七五三まつり」を、本年も左記により盛大に執り行いますので、皆様お誘い合せの上御参拝下さいます様ご案内申し上げます。

記

期間　平成九年十月二十六日～十一月十六日
（尚、この期間以外でも、おまつりは行っております。）

初穂料
一件（一人）三〇〇〇円
一名増すごとに二〇〇〇円の追加となります。

授与品
御祈願お申し込みのお子様には、お守り、千歳飴、御幣などを授与いたします。

余滴

九月末だったと思う。テレビニュースで、アメリカの宇宙船が宇宙船ミールにドッキングする様子を見た。今を去る十年前一九八六年、旧ソ連が全力投球で世界にその実力を知らしめた宇宙船である。その名はミール（平和）号である。

旧ソ連から打ち上げられた宇宙科学ステーション・ミール号は十年を超て、現在も宇宙を飛び続けている。

ニュースを見る迄、旧ソ連の宇宙船が、人工衛星が飛んでいる事を忘れていた。アメリカケネディー宇宙センターより打上げられるロケットは数日、数ヵ月で地球に帰って来る。これが普通感覚になっている自分におどろき、自分の単純さに気付いたのである。

一九五七年十月四日、ソ連は人類初の人工衛生スプートニク一号の打ち上げに成功し、全世界にその偉業を誇った。アメリカは完全に一歩おくれたのである。その後両国を中心として、宇宙開発が始り、人工太陽（核エネルギー）と人工衛星（宇宙工学）の飛躍的発達となり、人工頭脳（オートメーション）へと発展した、さらに人工生命誕生も可能な処まで進んで来ている。

四十年の歳月でここ迄進んだ時代が過去にあったであろうか。テレビの画面に映るミール（平和）号の満身創痍の船体は宇宙船と呼べる姿ではなかった。船内の人々は、今の世を、旧ソ連国をどの様な気持で宇宙から見ているのであらう。

第四三六回　宗像大社歌会詠草

大野展男選
毎月末日〆切

庄内　原田　衛

妻は逝き長女先立ち三女また野辺に送りぬ老のわびしさ

（評）肉親三人の死を「逝き」「先立ち」「野辺に送り」と、三様に使い分けてはかなさのにじむ作であり沈痛である。結句を例えば「吾れ八十五」と作者の年齢を示すのも一方法。

名古屋　小田　喜一

生足が定着したる若き娘ら素足はいつか死語となるべし

（評）若者たちの風俗に従うようにして新しい言葉が次々と生れ次々と消えてゆく。そんな世相に、ちょっぴり反撥し、皮肉っている一首。大人の作品である。

田野　森　甲子

捨て得ずに足踏みミシンは縁の隅君子蘭の鉢置きて楽しむ

（評）物を大切にと、育った戦中派には、使わなくなったからと言って簡単には捨て得ない。戦中派の気持を代弁するような作品。君子蘭の名が、ほのぼのとした気分を誘って呉れる。

田野　森　つるの

苺苗に花芽の分化促すと冷蔵に入れ吾らも休む

（評）海苔も冷凍海苔網を使用することにより飛躍的に収穫が伸びたとか。苺の苗を冷蔵室に入れるのも苺の開花を早め収穫をふやすための作業なのだろう。「吾らも休む」の「も」は苺と一緒にと言う意味で、苺と共に生活する苺農家のきびしさと決意がうかがわれて佳品である。

田久　井上　光

終戦日朝空晴れて響きくる雀おどしに心やすらぐ

福岡東　板矢　美春

台風の去りにし朝は雲ひくく柿の木に鳴く蝉時雨聞く

朝野　藤井　浩子

彼岸花たちまちに茎伸びたちて視力弱りし夫も気付けり

福間　中村　勇

集団で登校する子にお早うと呼べば元気な声返りくる

原　八波　五月

夫ゆきて八年すぎぬ永らへてきびの葉ぬらす雨の音聞く

土・穴　瀧口　敦子

夕暮るる林の中に子を呼ぶかしきりに鶯の鳴く声聞ゆ

曲　天野　玲子

わが太き指もてむける白桃の肌なめらかし食むをためらふ

吉留　高山　信子

ふるさとにひとりの母にたべさすと買ひたる章魚は手にまきつけり

八幡西　有吉　陽子

声の出ぬ難病の友パソコンに会話をなすを夫ははげます

名古屋　小田　留子

古布もパッチワークの蝶となりのれんに憩い風と戯る

ひかりヶ丘　藤原みさを

酒飲みし子ら戯れて母われの胸乳に寄りしをなつかしみ言ふ

福間　池浦千鶴子

虫すだく狭庭ともなし窓の外閉めるに惜しき蟋蟀の声

武丸　中村さつき

熱帯夜つづきて台風十八号それより涼し秋の夜となる

鐘崎　安永　久子

八十逝き夫は目を閉じ日に幾度電動椅子に身をほぐしをり

自由ヶ丘　細川　絹子

天に向き泰山木は花盛り夕光の中輝きまぶし

徳重　石松ヤス子

明日嫁ぐ姉と別れの月見せし六十年前今一人なり

宇美　岩男　亘

億年の時空のなかの吾とおもふ秋の夜空に飛ぶ星見つつ

城南ヶ丘　中間日出子

孫もまた子供が犠牲のニュースにはたえがたくなりテレビ消したり

日の里　大和美由紀

大安を選びて書きぬ嫁ぐ娘の結婚式の案内状を

日の里　石松　知子

電話にて済む用件も時にして単身赴任の子へ便り書く

津屋崎　佐々木和彦

曼珠沙華花の四五本折りたるはここを通りし児童たちらし

池田　小田　イセ

国技館の観衆の中両陛下公務はなれて安らぎいます

福間　井上かつみ

遠き日を夢に描きて植えし栗友とひろいてひとときを過ごしぬ

福間　二宮　末子

波荒く気性も強き沖津宮護らせ給へ宗像の里

光岡　河村　久光

ひねもすを部屋に籠りて語りいる男は常に詩人の思惑

西欧国家観の恐ろしさ

国があって国民があるのか、国民があるから国が要るのか。これは議論はされないが、実は重大な問題である。八月下旬、まづ北欧スウェーデンでのスクープ記事から事件は表面化した。一九三五年から七六年にかけての約四十年間、政府が優生学に基づいて、優秀な将来の国民造りのために、一方的に優秀でないと見たかなりの数の国民に、強制的に不妊手術をしてゐたことが明らかになったのである。

○

スウェーデンといえば世界有数の福祉国家、日本人も学校でまるで「社会保障で誰もが快適な生活を保障されてゐる理想の天国」でもあるかのやうに教へられた。しかし、この福祉国家を維持する背後には、こんな隠された恐ろしい事実があったのだ。報道によると、これは「不妊法」といふ正規の国会の決議に基づいてをり、中には眼鏡をかけてゐたといふそのことだけで、不妊手術を強制実施された女性などもあるさうだ。

報道は波及してスウェーデンのみでなく、ノルウェーやフィンランド、スイスなどにも類例があることが判明した。中でもスイス西部のボー州で一九二八年に成立した「強制不妊法」は、「社会に劣悪遺伝子を残さない」といふ目的のため「貧困だが子が多い」「道徳的に堕落してゐる」「知恵遅れである」住民を医師が州政府に通告、州が多くの若い女性に不妊手術をおこなったが、それがベルリンのドイツ大使館を通じてドイツに伝はり、あの「民族純化」を求めるナチス・ドイツの法律の土台になったやうだ（毎日新聞）といふ恐るべき情報までが伝へられた。

事態はその後も西欧の他の国々にまで広がってゐる。これらの事件の背後には、国が国民を選別して当然だとの思想が共通して見える。東洋人である我々は「民が統治者（政府）を選ぶ」ことはあり得ることと考へたが、「統治者が民を選別する」ことはあり得ないと固く信じて歴史を重ねてきた。特に日本においては民は「おほみたから」と称されて、常に最も大切な存在であり、民を治めるとの大前提の上にあらゆる政治議論がなされてきた。それが西欧では必ずしも常識ではなかったのだ。

○

わが国にも「優生保護法」といふ、運用の意図目的を誤れば明日にでも凶器に変はる法律もある。それでなくとも西欧思想に首まで漬かった日本のことだ。どこかの団体や政党のやうに、財源などは無視をして、ただただ「福祉は聖域」「年金を増やせ」などとのみ叫んでゐたら、そのうち国家破産を避けるために、国が民を選ばうとする事態も生じかねない。機械的に帳尻合はせで考へれば、弱者発生の生まれる前の強制的予防が、もっとも都合の良い環境だ。

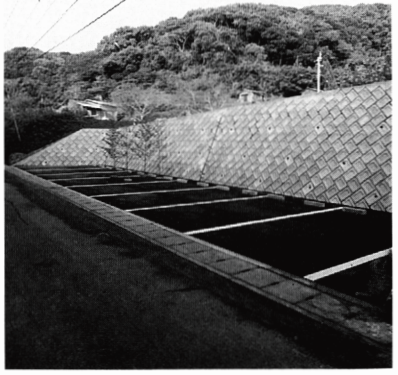
社会福祉は近代国家にとって大切な問題ではあるが、それを追求するあまり、国が国民を選別するやうな脱線は許されない。どんな人とて神からの授かりものでありはからである。日本人が育んできたこの発想を大切にしよう。家庭が壊れ、住民同士の連帯感が欠如し、個人主義が暴走する現在、我々の身辺にも、気づかないうちに、恐ろしい思想面での罪と汚れが近づいてゐるやうだ。

（神社新報）

中津宮に駐車場が完成

平成の御造営、中津宮本殿解体御修復事業の付帯工事として、中津宮駐車場の造成工事が十月十六日に完了した。

これは中津宮本殿裏の県道を挟んだ向い側の台地を、所有者沖西敏明氏が駐車場用地として寄贈され、去る七月頃から、大島村の土木業者真鍋組に工事を依頼していたもの。



高さ四米の台地約七十坪を切り崩し、ブロック積みの擁壁で三方を囲み、普通車八台が収容できる駐車場が完成した。

宗像大社中津宮が鎮座する筑前大島は、内陸から玄海洋上十キロの地点にある離島で、島内の交通は以前は自転車やバイク、軽自動車が主たるものであった。

モータリゼーションの急速な発展と大島・神湊間とを結ぶ連絡船に大型フェリーが就航するにつれて島内にも車が増加し、また中津宮の祭りに島外からの参拝者も多く、土曜・日曜は家族連れでフェリーは満船状態である。中津宮周辺には駐車場がなく、周辺の県道も駐車禁止で参拝者駐車場の造成が求められていた。

これで懸案のひとつが解決された。

田島放生会

爽やかな秋空のもと厳粛裡に斎行

神郡宗像に秋の到来を告げ、「田島放生会」の呼び名で親しまれている当大社秋季大祭が、去る十月一日より三日間、爽やかな秋空のもと厳粛裡に斎行された。

大祭の諸準備は、十月二十九日より、地元総代、協力会々員の皆様の奉仕で進められ、翌三十日の午前中には万端怠り無く整った。

大祭前日の三十日、午後五時より総社地主祭、同六時に宵宮祭が献灯の中、太田権宮司以下神職奉仕のもと斎行され、三日間に亘る大祭が無事執り行われるよう祈念された。

十月一日、午前九時三十分、大祭の幕開けを彩る「みあれ祭」が、打ち上げ花火を合図に、盛大に執り行われた。大島港を出港した約四百隻に及ぶ大船団が海上を神幸。玄界洋上に約一時間にわたり、勇壮なる海上絵巻を繰り広げ神湊港に入港。沖津宮、中津宮の御神璽を輦台に迎え、辺津宮御神璽を戴いた輦台と共に、頓宮へと陸上を神幸。

三宮に鎮まり坐す三女神の大前にて多数の崇敬者が参列し、頓宮祭が斎行された。

続いて、三台の御座車で辺津宮へと入御され、各地の篤信者、宗像七浦の沢山の海川山野、種々のお供物が奉献された本殿にて入御祭が執り行われた。太田権宮司により国家鎮護、五穀豊穣、大漁満足を祈念する祝詞が奏上された後、主基地方風俗舞が同保存会々員によって奉納された。次いで宗像大社氏子会出光会長、太宰府大満宮内田称宜を始め、各界の代表が玉串を捧げ拝礼され、一日祭は滞りなく斎行された。

二日午前八時、流鏑馬命名式に続き、流鏑馬神事が執り行われた。早朝、小雨が降りあやぶまれたが、神門前に整えられた馬場道に三頭の馬が姿を現わすと沿道の人々より歓声が湧いた。古式ゆかしい烏帽子、直垂姿の射手が疾駆する馬上で的に向け矢を放つ度に、見物の人々からは歓声と共に拍手が贈られていた。

午前十一時、二日祭斎行。神社庁宗像支部長大澄光信宮司（福間町・諏訪神社）外一名による郡内神職奉幣の後、宮地嶽神社献幣使浄見祢宜、また前日より当社に斎泊し心身を浄められた氏子奉幣使林利雄氏（宗像市）による奉幣詞が奏上された。次に約五百年もの伝統を誇る翁舞が、喜多流梅津忠弘氏らによって奉納され、国民の平穏無事、延命招福が祈念された。境内に鼓と笛、朗々と謡曲が響き渡り、参列者はしばし幽玄の世界を堪能した。

大祭三日午前十一時、総社祭が斎行された。昭和天皇御製の神楽歌が、琴と笛の音色に合わせ、十二単衣姿に身を包んだ舞人（玄海中学校女生徒四名）の舞姿に、初秋の境内を訪れた多くの参拝者は魅入った。

三日祭に引き続き、第二第三宮秋季大祭、宗像護国神社秋季大祭が斎行された。

今年度も護国神社には、福岡県護国神社荒木田宮司、県議会議員、市町村長ら多くの参列者が集い、護国の礎として尊い命を散華された郡市出身の英霊に対し、敬虔なる祈りが捧げられた。

午後二時より、拝殿にて茶席が設けられ、南坊流瀧口社中の皆様による献茶祭が斎行され、御神前にふくいくとした香りの濃茶が立てられ奉献された。

かくして宗像大社秋季大祭は、秋晴れのもと滞りなく盛大と厳粛裡に終了した。

一誌一話 (63)

中国調査紀行 (26)

樂 杏 子

八月十六日(火)　朝六時起床。いよいよ中国探査行も、今日より帰路に就く。新疆空港には七時に着き、八時四十分発北京行の搭乗手続きを終え、飛行機の到着を待つ。

新疆空港は新設の小さな美しい飛行場であった。ウイグル地方の開発にと造られた空港は、何時も大小の荷物ラッシュでごった返しだという。

空はまっ青に晴れ上り本日も快晴。外はどんどん温度が上昇しているようである。出発が遅れていたが、待つことしばし、ようやく乗り込むようになり飛び立つ。ボーイング二〇三。機内も引越しの荷物が溢れている様に、山をなした荷物と人の群れである。日本と同様に機内持ち込みは規制していると言うが、この国ではそんなことには頓着しない。「自分の物は全て己れが」、という中国流が大いに幅を利かしている。

九時頃雲海を抜け、眼下に萬年雪を戴く険しい山々を見降しながらの空の旅である。

一〇時過ぎにジュースと機内食とが配られ、一同ようやくにして今日の朝食に有り付いた。空からの見下しは無理であるが、いま我々が乗っている飛行機が飛ぶ雲海の下には、古代文化都市「敦煌」がある。

空を飛ぶこと三時間、北京空港へと出た。

雲海を出て市街と空港を見下すが、ここ北京空港も十億の民を抱える中国の首都、入り口であり、空からの出入りも是後を分かつ引っきり無しで、窓越しに上下する多くの機影が目に入る。吾が機も空きを待つため、上空を大きく旋回し、遊泳しながら時を稼ぎようやく着地した。

ここでもまたまた待たされ、荷物を受け取るまで一時間半もかかり、ようやく空港を後にしたのが十四時過ぎである。もう半日が終わっている。

外は温度四十度以上あり新疆より湿度も高く暖くて汗ばむ。遅い昼食を定点飯店でとり、北京市街を歩き廻る。西湖大酒店で晩餐会をして、今回の最初の夜と同じ「友誼賓館」に二十時に入る。就寝。

西洋の世界と東洋とを結ぶ路シルクロードと、西洋文化の入り口の都を一寸と通った二週間の調査探索行も終りを迎えた。明日の万里の長城で終りである。

敦煌は中国大陸の中央部にあり、砂漠のオアシスがなす都であった。昔はゴビの砂漠とタクラマカンの砂漠とが接するこの地は砂が集まり出来た地「沙州（さしゅう）」と呼ばれている。

漢代頃から人と人・物と物とを混えて、文化が往き来する都文化都市として大きく発展してきた。一方西域に対する重要拠点都市の軍都としても栄えてきた。やはり敦煌は砂漠の主、砂漠地帯の大都である。

此を通る道を中国では古くから、絹織物を輸出する道として「絲綢（シタン）の路」と呼んでおり、日本名の「絹の道」そのものである。このシルクロードは、東西文化を橋渡したローマから長安（今西安）まで通じている交流の道である。

〔ご案内〕十一月の各神賑行事

第十回 西日本菊花大会

西日本地区は元より全国的に注目を集めている菊の祭典西日本菊花大会は、本年も宗像大社特設会場に於て開催される。

本大会は、菊作り九州一を決定する大会として、福岡県を始め、大分、佐賀、長崎、熊本、宮崎、鹿児島、山口県各地から、代表的菊花製作者が丹精込めて作成した菊花約三〇〇〇鉢が、一堂に会し技を競う。秋晴れの神苑に大輪、懸崖、盆栽、総合花壇など見事な菊花が咲き競います。

期　日　十月三十日～十一月二十三日迄
会　場　境内全域（展示ハウス内貝殻棟）
表彰式　十一月十六日

―◇―◇―

第十回 宗像大社刀剣展

菊と刀といえば、古来より日本の象徴であったように、日本人の心をひきつける魅力があります。

本年も神刀を中心に、崇敬者の方々の御協力のもと、鎌倉時代から現代までの刀剣類を展示します。

期　日　十一月一日～十一月二十三日迄
会　場　宗像大社神宝館一階
拝観料　三百円

―◇―◇―

第二十六回 奉納剣道大会

宗像地区の各剣道教室や学校で稽古に励む、小学生から大学生迄の男女剣士約五百名が出場、宗像地区最高剣士の栄誉を賭けて熱戦を繰り広げます。

期　日　十一月二日
試　合　午前九時より
会　場　本殿脇境内（雨天の場合は玄海少年自然の家）

―◇―◇―

第二十三回 奉納吟剣詩舞大会

錦秋の菊花薫る境内に、我が国の伝統と「大和精神」を伝える吟道に永年精神されている、熊本市に本部を置く清香吟社（会長益中鵬山）社中の会員約百名が、神前に詩吟、剣舞を奉納。清明殿に於て、日頃練磨した自慢の喉で詩吟剣舞大会が行われます。

期　日　十一月三日　午前八時三十分より
会　場　宗像大社清明殿

―◇―◇―

第二十三回 奉納柔道大会

宗像市郡内中学校一、二年生約七十名が出場、新人戦を兼ねて母校の名誉と日頃の練習の成果を発揮せんものと対戦、力一杯の奮戦が行われます。

期　日　十一月八日　午後一時より
会　場　本殿横境内（雨天の場合は玄海中学校武道場）

―◇―◇―

第二十六回 献詠短歌大会

福岡県内を中心に、各地の短歌愛好者から、たくさんの詠草が寄せられ、著名な斯界指導者の先生方を選者としてお招きし、講評・指導を受けると共に、参加者相互による批評、感想を発表するユニークな大会として好評を得ています。

期　日　十一月八日　午前十時より
会　場　宗像大社清明殿

―◇―◇―

第二十五回 秋季奉納盆栽展

宗像地区盆栽愛好家が、春、秋と年二回盆栽展を開催しています。

秋の盆栽展は、春の盆栽展が皐月や藤など花物を中心としているのに対し、松柏類の木物を中心とした盆栽が約五十席展示されます。

期　日　十一月十二日～十六日迄
会　場　祈願殿一・二階ロビー
観覧時間　午前九時三十分～午後五時迄

―◇―◇―

第十七回 少林寺拳法奉納演武会

この演武会は、宗像地区の少年拳士、大学生、一般拳士百余名が参加、日頃の修練の成果を神前に奉納します。

期　日　十一月十六日
会　場　本殿横境内（雨天の場合中止）

―◇―◇―

第二十四回 宗像大社本因坊戦

宗像地区囲碁界実力ナンバーワンを決める大会で、宗像郡市内より囲碁愛好家約百名の有段者が出場、四段以上の実力者による本因坊戦と、一般参加選手による有段者の部が行われ、盤上での熱戦が繰り広げられます。

期　日　十一月二十四日
受付時間　午前九時三十分から五十分迄
会　場　宗像大社清明殿

宗像大社東福間氏子会
結成十周年記念式典盛会に開催

―団地住民の任意による氏子組織
一五〇名の会員から四〇〇名に発展―

宗像大社東福間氏子会（会長的場和夫氏、会員四〇〇名余）の結成十周年記念の式典が、九月七日（日）午前十時より東福間中央公民館に於いて盛会に開催された。

式典には会員八〇余名が出席、宗像大社から養父宮司名代として氏子会担当の山田祢宜、大社氏子会より地元福間町の倉元清彦副会長が来賓として出席した。

井場正直副会長の開会の辞の後、国歌斉唱、敬神生活の綱領唱和を行い、的場会長の挨拶に続き、山田祢宜、倉元副会長の祝辞の後、宗像大社巫女二名が「浦安の舞」を演舞、婦人会員四名の大正琴による「天鼓道」外四曲の演奏、会員で詩吟、尺八、剣舞の教室を開かれる福家玉山師外一名による「厳流島＝武蔵と小次郎の決闘」を詩吟と演奏を背景に剣舞が行なわれ式典に華を添え、出席者一同より盛大な拍手が送られた。

次に宗像大社の昭和の御造営時に製作されたビデオ「神々はよみがえる」が放映され、一同改ためて大社の由緒と歴史について認識、第一の故郷と東福間団地に永の住家を建て、宗像大神の御神徳と御加護で氏子として平和な生計を営めることへの感謝の念を表していた。

式典は遅滞なく進行されて、奥村保夫副会長の閉式の辞を以って終了、引続き同会場に於いて祝宴が催され、出席者一同和やかに懇談を行い午後一時過ぎ散会となった。

宗像大社東福間氏子会は去る昭和六十二年九月二十一日に「往古より宗像市郡の守護神として、広く崇敬される御神威・御神徳を団地住民に認識して戴くと共に、住民相互の融和と親睦を深めることを目的として、宗像大社東福間氏子会を結成する」との主旨の基に結成された。

結成に至る迄には、今は故人となられた初代会長を務められた大曲米二氏、東宏雄氏、現会長の的場氏、井場、吉田一夫、奥村各副会長の各位を始め住民有志が、再々に渉り協議を重ね住民に計って、「既存の宗像大社氏子会に入会するのではなく、団地住民独自による氏子の組織を創る」ことに決定、大社と氏子会の承諾を得て規約等を整え、住民への啓蒙を積極的に行い一五〇名余の賛同のもと大曲氏、副会長に東、井場両氏、事務局長に的場氏、理事に吉田氏外十二名を選出して、記念すべき第一歩を踏み出し、爾来十年を迎え会員も四〇〇名余（戸）を数える大組織となっている。このことは一重に大曲会長以下役員の方々の敬神の念と地域住民への融和と親睦を精力的に推進された結果であると共に、的場会長を中心に現役員各位の熱意と赤心に依るものと深く敬意を表します。

宗像大社東福間氏子会の自今益々の発展と東福間団地の永久の平和、会員各位の幸福を祈念致します。

秋の交通安全県民運動
交通安全キャンペーン実施

去る九月二十四日、福間町村山田の県道で、秋の交通安全県民運動にちなんで宗像警察署が交通安全キャンペーンを実施した。当社も神職一名、巫女三名が出向し、交通安全協会会員たちと一緒に街頭運動を行った。

同署では、毎年春秋の交通安全旬間に交通事故撲滅を願って、交通安全協会や行政を始め関係諸団体と協力して、交通安全キャンペーンを行っている。

当日は午後三時より約一時間、旧国道三号線を通行する車に、啓蒙用チラシや、飲料水、事故ナシにちなんで果物のナシ、お守り等を手渡し、「安全運転」をお願いします」「シートベルトの着用を忘れずに」とドライバー等に一人一人に声をかけた。

又旧三号線は交通量も多く、交通事故が増えており、「交通取締重点路線」の一つにされているし、このキャンペーンが、少しでも交通災害の解消に大いに役立てばと宗像署員を始め諸関係団体の人等の呼びかけの声にも力がこもっていた。

"おもいやり、ゆずりあいで安全運転を心がけましょう"

社務日誌抄

九月一日　月次祭
横浜市上月永文氏参拝
九月五日　出光岐阜店主旅行会十八名参拝
九月六日　NHK大阪取材打合せの為来社
九月九日　出光タンカー㈱社長古谷進氏参拝
九月十日　宗像大社秋季大祭打合せ四者会談
九月十一日　宗像菊友会講習会
九月十二日　飯田猛氏外北海道体育協会役員来社
九月十三日　沖津宮神璽迎え
九月十四日　宗像大社菊花会理事会
九月十五日　月次祭
島根県石見一宮物部神社一行参拝
主基地方風俗舞保存会打合せ会
出光興産㈱総務部次長斎藤誠氏来社
九月十六日　宗像大社氏子会総代総会
九月十七日　出光興産㈱総務部次長斎藤誠氏参拝
京都国立博物館学芸員社玉三十六歌仙撮影の為来社
九月十九日　ヤマト運輸㈱福岡主管支店六十名参拝
宗像郡遺族会役員会
九月二十日　太宰府天満宮小鳥居権宮司他一名来社
九月二十二日　国立博物館準備室石山次長国宝展の件にて来社
宗像記者クラブ秋季大祭報道説明会
九月二十三日　皇霊殿遙拝式
飯田猛氏外タケハ会沖津宮遙拝所ハマユウ植付け清掃奉仕
九月二十四日　玄海町消防団、駐在所秋季大祭警備打合せ会
田島区遺族会々合
宗像郡市内交通安全キャンペーン神職一名巫女三名出向於白水峠
九月二十五日　宗像大社奉納盆栽展役員会
門司区老人大学百名来社
九月二十六日　宗像大社責任役員会開催
出光エンジニアリング参拝
九月二十七日　清水市宗像神社宮司丸尾恒雄氏外二十名参拝
九月二十九日　地元総代並協力会秋季大祭諸準備奉仕
九月三十日　秋季大祭総社地主祭、宵宮祭
京都国立博物館三十六歌仙の件にて来社

宗像大社歌会 俳句作品集（四一四）

福　間　森　清

一人守る寺の事務所の柿の音

福　間　二宮　末子

早苗田を白さぎ一羽散歩する

日の里　花田いつ枝

溝蕎麦の塞きておりし水の音

若　松　髙橋　忠實

十五夜や無月となりて虫の声

自由ヶ丘　綱川　絅子

朝起きの苦手な主かねたたき

小　笹　山下しづえ

かたまりて手鞠に見ゆる彼岸花

東　郷　吉武　湧泉

流燈や別れを惜しむ幼佛

東　郷　中野　きみ

嫁に聞く世間話や夕端居

東　郷　吉田　衿子

鳳仙花小さき怒のはじけ飛ぶ

東　郷　吉田　奇子

朝鵐や研げば砥石になじむ鎌

東　郷　三浦美千代

釣瓶なきつるべ落しの日の暮るる

東　郷　有吉亜紀子

酔芙蓉迎への車の来し気配

東　郷　田中　雨葉

海女の道海に落ちこみ鰯雲

東　郷　木原　房子

野の草をかっちり掴む蝉の殻

藤　沢　井上　玄洋

鰡跳ねて波紋広げる朝の川

（続）浜の寄物 121

いしいただし

平成八年三月に津屋崎町史資料編上巻が刊行されたが、その中から漂着に関するものを拾いあげてみた。

元禄八年（一六九五）一月二十一日、朝鮮の漁船津屋崎浦に漂着、役人付添い長崎へおくる。

一衣帯水、韓国からの漂着　白石浜

元禄十年一月七日、鐘崎沖漂流中の朝鮮船一艘、津屋崎浦へ曳船後、長崎へ送る。

寛延元年（一七四八）五月二十四日、越後の城米廻船、津屋崎沖で破船する。この時城米はほとんど海に沈んだが、これを引揚げて処分している。

寛延四年（一七五一）一月十四日、朝鮮漁舟大島に漂着、津屋崎で検察の後長崎へ送る。

明和七年（一七七〇）十二月、恋の浦に対州船（対馬）座礁、村民の不始末で頭取ら処罰される。

安永六年（一七七七）一月十日、朝鮮船一艘沖ノ島漂着、津屋崎に漕込み長崎へ送る。

安永六年一月十四日、唐舟大島へ漂着、役人津屋崎へ出張、朝鮮漁舟とわかり長崎へ送る。

天明三年（一七八三）十二月二十三日、朝鮮の漁舟大島へ漂着、津屋崎より長崎へ送る。

天明七年（一七八七）十二月十二日、大島漂着朝鮮漁船、老朽のための漂人のみ長崎へ送る。

天明八年（一七八八）新宮浦大庄屋、津屋崎漂着の朝鮮船、長崎曳航中出精して褒状を受ける。

寛政八年（一七九六）十二月二十二日、朝鮮漁舟大島へ漂着、津屋崎へ廻漕し長崎へ送る。

享保元年（一八〇一）十二月十八日、朝鮮漁船大島に漂着、津屋崎へ廻漕し長崎へ送る。

文化五年（一八〇八）十一月二十三日、朝鮮の漁船大島へ漂着、津屋崎へ廻漕し長崎へ送る。

文政六年（一八二三）一月、防州の石炭積船、津屋崎浦長曽根に乗上げ破船する。

文政七年（一八二四）勝浦神湊両浦の者、長縄漁に出て破船、死骸長州へ流れ寄る。

天保九年（一八三八）五月、越後の城米積船、津屋崎塩浜下に流れ着く。寛延元年の時のように米を引き揚げ処分をしている。

文久四年（一八六四）津屋崎海士門司田の浦沖に沈んだ薩州蒸気船の荷物取揚げに雇われる。

慶応二年（一八六七）一月、「勝浦漁舟唐津領に漂着し乗組四人溺死、旦那寺での弔いを願い出る」等がある。漁船を船と舟にかかれている。季節的には十二月から翌二月は季節風が強い遭難事故が多い。朝鮮からの漂着が多く、長崎へ船人共に送られている。

福間町史資料編三（今林文書）は平成九年三月に刊行されたが、津屋崎ほどではないが、漂着した荷物がこまかく記述されて興味がある。

今林家六代清七は（元禄二年（一六八九）同十五年まで福間浦弁指をし、正徳二年（一七一二）二月に死去。その間、年代不詳だが、福間浦へ流れ寄りの梶の件につき、那珂郡志賀島へ注進するのが見える。これも年代不詳だが異国船破損につき藩からの通知がある。異国船とあるのは、津屋崎での漂着のほとんどが朝鮮船で、これも朝鮮の可能性があろう。

八代清助は元文四年庄屋清助を、延享二年五郎石衛門と改名、のち大庄屋となり天明三年（一七八三）死去。

元文四年（一七三九）十月、福間浦船頭平次船、宗像郡津屋崎において破損する。これは「風強ク波高大にて」破損したものである。

明和六年（一七六九）十二月、福間浦へ漂着した対州船（対馬）の漂着物書上げ（一）（二）（三）からなり、当時の船にどれだけの種類と量が積み込まれていたか、乗員の所有物等も分かり、資料として貴重で興味もつきない。尚、この時対州船は乗員四名（死骸）であった。

津屋崎・福間両町史資料は浦研究にとって貴重な新しい発表が満載されている。浦研究者は是非目を通してもらいたいものである。

この原稿を書き終えた時、九州大学の小林茂先生から「漂流・漂着からみた環東シナ海の国際交流」をいただいた。次回はそれについて触れたい。

青柳種信著 平野国臣写 瀛津島防人日記（上巻ノ五）

大しまに、宗像の神一柱おはします。中津宮と申は此宮也。

御社のまへに小川あり、天の河といふ。天の安河によれる名成べし。彦星の宮・織女の宮と、川を隔て左右にあり。男女のつまをねがふもの、此やしろにもるという年、中ごろの書にも見えたり。上の高き峯を御嶽といふ。天照大御神のみや也。

四月朔日。同じ所なり。瀛津しまにわたる人々、爰より、朝ごとに海に入て身そぎす。そもそも此津は、いっしき皇神の静まります（気）にや、人ごとに、物いはひ（斎）して、けがらはしきことを、いたく忌はばかる。身まか（死）りたるをいむ（忌）はさらにもいはず、女の月のけがれあるをば、別戸をつくりて、主の家にいることなし。そのほか、よのつねはなほざりに打過すことを（も）此浦人はつつしみて、かりにも犯すことなし。

さきに過こし志賀の嶋も同じならはし也。いづこも、みやこめきたる所は、人の心さかしだちて、物いみなどするをば、愚なることにいひあふめるを、かかるひなびたたる所には、かくりて古の風の残れるもの也。かかるならはしも、神からならずや。

けふ御嶽にのぼりて、をちこちを見めぐらすに、東は長門のしまじまよりはじめて、此国なる山鹿の岬、南には豊前の彦の山（英彦山）、坤には御笠郡なるかまど山、早良郡なる背振のみね、怜士郡の雷嶽・浮岳

同郡の姫しま、肥前松浦郡なる名護屋崎、同郡の平戸の嶋、壱岐のしま、此国なる大蛇島、乾のかた（西北）に対馬見ゆ。

瀛のしまはいづこぞ、と見れど見えず。

北のかたは、凡て何もみえず。猶めいた（眼痛）き迄みるに、辛くして浪の中よりものの角さし出（し）たらんが如し。おのが行べき嶋はあれにこそ、といふに、皆人肝きえ（消）たり。

いかで一たびは御嶋（瀛ノ島）にまゐりてしがな、と心にねがしかど、いまかくものすべしとは思ひかけざりしを、いとたふとく、遥にをろがみまつりて、

つづく

故郷の神社 (34)

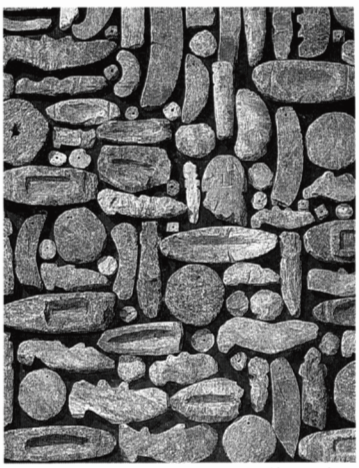
露天祭祀に供えられた品々

〈滑石製形代類〉

沖ノ島古代祭祀の終末期の一号祭場からは、滑石で作られた小玉、臼玉、円板、有孔円板に併せて大形勾玉、大形有孔円板、変形子持勾玉、人形・馬形・舟形の形代類が大量に出土してくる。特に形代類は多く、なかでも海及び船の安全祭のためか舟形が目を引く。

滑石は石の中でも一番柔らかく加工しやすい石質の為、古代からその用途は異っていても色々の目的を持って使用されてきている。

弥生時代には玉の一つに、古墳時代になると、四世紀代つまり前期古墳時代頃からすでに祭祀用雛形品の作製に使用されてきている。



形代類とは祭祀用雛形品の中でも人形・馬形・舟形の総称としての呼び名である。沖ノ島では人形と舟形には金銅製品が若干奉献されているが、その全てが滑石製品である。

日常生活にかかせないのが道路往来である。人形や馬形に関しての役割を良く表現しているのが、「肥前国風土記」である。常によく引用されているが、あらためて記すこととする。

肥前風土記　佐嘉郡

「……山の川上に荒（あら）ぶる神有り。往来の人半ば生（い）き半ば殺（し）にき。茲に縣主等が祖大荒田、占問ひき。時に土蜘蛛の大山田女・狭山田女といふもの有り。二（ふたり）の女子（おみな）の云へらく、下田村の土を取りて、人形（ひとがた）馬形（うまがた）を作りて此の神を祭祀（まつ）らば、必ず応へ和（なご）むこと有らむとまをしき。即ち其の辞の隨に、此の神を祭りしに、神此の祭を歆（う）けて、遂に応へて和みき。略……」。峠の往き来に際しての道祖神の祭りに、土製の形代を作り奉献したことが記されている。

今、各地の祭祀遺跡より土製・木製・石製・鉄製・金銅製と各種の人形・馬形が出土している。また海辺や川辺の遺跡からは舟形も出土してきている。

日常生活とはいくらか異にする為か、舟形に関する記録はみることがないが、しかし古代から物の多量輸送と文化の伝播には欠かすことが出来ないというより、一番大事な道具である。分けても船がはたした役割は、遠方に行けることと、遠方を知ることである。四方を海に囲まれた日本では、知らない土地や知らない人との交わりが船で出来たことである。

やはり沖ノ島の役割の中でも一番先にあげられるのは海の安全である。一号祭祀の頃は時期的にも対中国大陸との外交である。いわゆる遣唐使及び遣唐使船の安全を祈る祭りである。

当時の唐は世界一の文化国家であり、シルクロードによって西欧文明も素早く手に入れることが出来る国であった。唐は大和としてはなにを置いても往き来したい重要な隣国である。

一航海が大型帆船四隻で一隊をなす遣唐使船は、舒明一年（六三〇）の第一次遣唐大使、犬上御田鍬が派遣されてより、寛平六年（八九四）の菅原道真の建議による停止まで都合一九回派遣されているが、帰還したのは十二回である。約半数しかの成功をみなかった分けである。

〈松〉